



**KANSAI
UNIVERSITY**

教職支援センター一年報

2014

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2014』 目次

教職支援センター年報の発行に寄せて	教職支援センター長 山本 登朗	1
投稿原稿		
<小論文>		
ループリックによる文章表現の評価学習法	文学部教授 安藤 輝次	2
社会科で読解力を高める教材の提示法についての一考察	非常勤講師 林 茂幹	11
<報告>		
教職に関する授業での「アクティブラーニング」についての 考察・報告	非常勤講師 尾崎 進	17
教職支援センター特任教授からの報告		
『教職実践演習』についての一考察	特任教授 北井 宏昌	24
「面接対策セミナー」について	特任教授 小野満由美	27
1. 教員の養成の目標		
関西大学教職支援センターの基本理念		30
2. 教員の養成に係る組織		
教員の養成に係る組織		31
教職支援センター規程		32
3. 教員の養成に係る授業科目		
教職に関する専門教育科目および科目担任者一覧		34
4. 教員免許状の取得の状況		
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科		40
介護等体験 参加者数		42
中学校・高等学校教育実習生数		43
教員免許状取得状況・免許取得者数一覧		44
教員免許取得までの諸手続き		51
5. 教員への就職の状況		
教員採用試験合格者状況・合格者数		52
教員採用試験「大学推薦」の応募状況・合否結果		55
6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組		
中期行動計画について		56
介護等体験事前指導について		57
2年次生対象「教育実習受講希望者ガイダンス」について		58
3年次生対象「教育実習ガイダンス」について		60
教員養成フォーラムについて		62

教員採用試験合格者との情報交換会について	64
教職専門科目担当者研究会について	66
教員採用試験合格者壮行会について	67
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	68
教員採用試験 面接対策セミナー	69
教員採用試験 受験案内一覧	70
教員採用試験対策スケジュール	71
教職支援センター 利用状況	72
教職関係ガイダンス日程	74
教職実践演習に係る履修カルテ	75
教育実習出向指導校一覧	76
教職支援センターと初等教育学専修との連携について	78
教員養成のための豊能地区3市2町教育委員会との連携協力について	79

7. その他

教員免許状更新講習一覧	80
連合教職大学院学内選考について（2014年度から実施）	81
教職支援センター年報 投稿規程・執筆要領	82
教職支援センター委員会委員名簿	84
教職支援センター特任教授紹介	86

『教職実践演習』についての一考察

教職支援センター 特任教授 北井 宏昌

新年度に向けての教育実習担当者会議で、特に『教職実践演習』について様々な視点で多くの意見が提言されている。4年生秋学期に履修する『教職実践演習』は、全学年で履修する教職課程の授業科目や活動の『学びの軌跡の集大成』として位置づけられているにもかかわらず、先行する『教育実習事前指導』・『教育実習(二)』とは明らかに異なった問題点が指摘されるのである。文部科学省が指示する「4事項からなる授業内容」や授業形式、さらには新設された経緯について等の理念についてではなく、担当する先生方の授業実践から提起された本学の実態であり、学生の取り組む姿勢である。

私は、自らの実践を通して『教職実践演習』についての問題点を次のように捉えている。教育実習が終了し、一般企業等への就職内定者が半数以上いる中での授業であることや卒業論文作成時期と重なるなど実施時期の問題があること。社会で生きる職業選択において教職への意欲の減退から、主体的に研究テーマを設定し演習していく授業への熱意が薄れ欠席が増えること。教員を目指す学生と、他職への道を決定した学生の取り組みのギャップが大きいこと。また、学生が主体的に学ぶことはどの程度可能であるかということも、考えておかなければならない。

平成26年度、私は、堺キャンパスで人間健康学部36人が履修し、千里キャンパスでは文学部・システム理工学部他11人が履修する『教職実践演習』を担当した。この二つの実践を振り返りながら、『教職実践演習』について報告する。

【堺キャンパスでの取り組み】

- ・受講生36人
- ・教職志望者14人【教諭・講師・私学講師10人、学校ボランティア等2人
小学校免許状取得履修2人】 教職志望率38%

入学時から教職を夢みながら、「一度、社会経験を積んだ上で先生になる」学生も多数いるが、ここでは含めていない。なお、人間健康学部教職実践演習履修学生全117人の教職志望率も、ほぼ同数の35%である。

全15回の授業で、前半、私が課題提示をして講義中心の演習を行ったのは5回、後半は模擬授業4回を行う。中の6回を使って、学生がテーマを考え3～6人のグループで主体的な研究を行い、報告会で互いの考えを交流する演習を実践した。

予め学生に教育実習での経験とその後の教育課題についてレポートを求め、それを基にして全員で議論し、テーマ設定及びグループ構成を進めた。この時、学生の問題意識及び関心が、A教師観、B授業観、C子ども理解の三観点に分類できることを提示した。いかにも一般的な表現ではあるが、観点を提示することで、本演習の趣旨が明確になり、学生の議論が活発になり、研究意欲が高まることを期待した。

全8グループのテーマは以下の通りである。

- A 教師観
 - 1 教師と生徒との信頼関係の築き方
 - 2 教師にとってのコミュニケーション力 — 説得力・会話力
 - 3 学校組織における教師間の連携

- B 授業観 4興味・関心を持った考えさせる授業のあり方
 5授業において、生徒の自由と教師の権威は両立するか
- C 子ども理解 6コミュニケーション能力の育成
 7子どもの背景と子ども理解
 8おとなしい子との接し方・理解の仕方

この講義期間で、グループ間においても、グループ内においても学生の学習意欲は、研究を進めるための資料や関係書籍の使用法、討議の内容と態度、調査方法やアンケート作成時の取り組む姿勢に表れ、差が大きいことが分かる。しかし、学生が自らテーマを設定し、主体的に取り組んでいるという自覚は見取れる。

テーマ『学校組織における教師間の連携』に取り組んだグループを紹介する。

体育教師を志望するKさんが中心で、企業内定者を含む計4人のグループである。

Kさんは、教育実習時の感想として、教科担当間、さらには同教科であっても教師間の授業や生徒指導についての意識や指導実態があまりにも異なることを批判していた。学校行事の実情を参加体験する中で、教師一人一人の担当教科や役割により、生徒への指導の姿、さらには行事の目的についての考え方に違いがあることに驚き、自らが理想とする学校のあり方と教師像について提案することを、テーマ設定の理由としている。

堺キャンパス在籍の教育実習経験学生を対象として「教師間連携について」、さらに、現役教師への教育現場における「教師間連携について」のアンケートによる現状の把握を行い、結果を分析し、考察を行った。

その結果として、同じ立場の教育実習経験学生は、体育教師と他教科教師の人間関係が希薄でコミュニケーションが少ないと捉え、その要因として、各教科の準備室が異なっており一堂に会する機会が少ないことやクラブ活動顧問として校内会議や打ち合わせへの参加が少ないことを挙げて報告している。一方、アンケート結果に表れた小学校現場の実態として、職員会議、各種会議での情報交換が徹底していることを理由として、教職員間のコミュニケーションがよく取れ、子どもの実態把握や指導の統一性が図られていることを報告している。これらの考察から、学校現場に立った時、教師間の連携についての必要性和改善策のより発展した追求を訴えている。

【千里キャンパスでの取り組み】

- ・受講生 11人
- ・教職希望者 9人【教諭・講師 8人、採用選考準備1人】82パーセント
他の3人も、将来的に教職を強く志望している。

千里キャンパス全教職実践演習受講者合計約600人の動向は把握できていない。

受講生11人は、科目履修生や留学経験や単位不足の理由による留年生で、なお教職免許取得を目指す学生で、教育に対する関心と意欲が高く、強く教職を志望している。小人数ということもあり、各自の経歴や毎時の授業を通じた発言から互いの思考や表現方法の特徴について敏感に感じ取っている。互いの発言に対しても、忌憚のない質疑ができています。教師である私の講義に対しても同様である。

従って、中6回の講義は、自らがテーマを設定し、グループで考察し、報告会として研究の成果や課題を全員で確かめ合うことを目標に取り組んだ。先に記したA教師観、B授業観、C子ども理解の三

観点については、私の方で特に指示するまでもなく、互いに理解することができた、と言っても過言ではない。

3 グループのテーマは以下の通りである。

- A 1 教師と生徒の距離感
- B 2 授業力向上のための伝え方研究
- C 3 褒める指導・怒る指導

3 グループとも、教育実習での経験を基にそれぞれの課題意識を明確に表現しながら、テーマを設定した。

『授業力向上のための伝え方研究』グループは、英語科教員採用選考合格した2人と地歴科専攻でダンサー修行の学生の取り組みである。自らが実践した授業が本当に生徒に理解されていたろうか、という最も素朴な問いから出発した。なぜ、英語、世界史を学習するのか。学習内容の捉え方、学習活動の指示、指導は適切であったのか。次々と新たな課題意識が提言されている。

まとめとして、①各教科の必要性、②指示の仕方、③わかりやすい授業の言葉遣い、④重要な学習内容・習得すべき活動設定、⑤授業は生徒同士の学び合いの場である、等より具体的な考察を続け、生徒が自ら学習する意義・目的を考える主体的な学びの場を作ることが大切であり、生徒が夢中になれる授業づくりが目標である、と表現している。

小人数であり、1 グループの報告を30分、質疑応答を30分、指導助言30分の構成で進めることができた。特に質疑応答は、それぞれの発言が報告者に対してだけでなく、11人全員の問題意識に繋がり、議論が活発に行われ、本来の演習としての展開ができた、ということができる。

本来は、もっと詳細な数字や授業記録を提示し、より綿密な省察を行わなければならないことは承知のうえで、感想や報告になってしまったことを反省しながら、より良い『教職実践演習』について自らの課題を挙げる。

『教育実習(二)』を核とした『教育実習事前指導』と『教職実践演習』の三科目は、一つの教職科目であると捉え、授業担当者、学生ともに教職課程についての目標と目的を明確に持つ。そして、一クラスあたりの受講者数を、今回の6割程度に減らし、学生がより主体的に取り組める環境を整える必要があると考える。